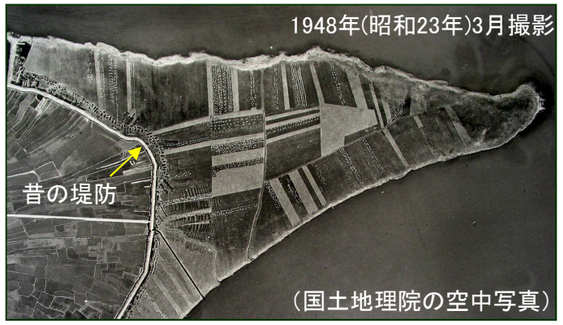
むかしの妙岐ノ鼻

左下の写真は1948年（昭和23年）の妙岐ノ鼻の様子です。現在(右下写真)の妙技ノ鼻とは異なり、当時は、茅葺き(かやぶき)屋根等に利用するためヨシ刈りが妙岐ノ鼻のほぼ全域で行われていたことがわかります。
また、妙岐ノ鼻の南東には本新島干拓地がありますが、この干拓事業は1947年～1963年（昭和22年～38年）にかけて行われており、干拓完成前の様子もうかがい知ることがきます。



妙岐ノ鼻の施設のご案内

妙岐ノ鼻には、野鳥観察ステージ、野鳥観察小屋などの野鳥観察施設や遊歩道といった自然を観察する施設が整備されています。また、堤防沿いには、トイレや駐車場も備えています。

お問い合わせ

水がささえる豊かな社会
独立行政法人
水資源機構

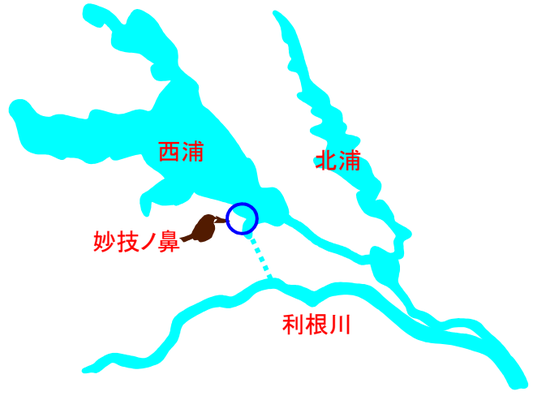
独立行政法人水資源機構
利根川下流総合管理所

〒300-0732　茨城県稲敷市上之島 3112番地
☎ 0299-79-3311（代表）Fax 0299-79-3316
https://www.water.go.jp/kanto/kasumigaura/
↑
←ウェブサイトはこちら

（令和3年11月版）

みょうぎのはな

妙岐ノ鼻



独立行政法人水資源機構　利根川下流総合管理所

生命を育む豊かな自然「妙岐ノ鼻」

妙岐ノ鼻（みょうぎのはな）とは

妙岐ノ鼻は、霞ヶ浦（西浦）の南西に位置する面積約５２haの広大な低湿地です。
この地区には、ヨシを主体とする霞ヶ浦最大の湿性植物群落が分布しており、環境庁による第２回自然環境保全基礎調査（昭和53年度）では、妙岐ノ鼻のヨシ、マコモ、ガマ群落が「自然の状態を保っている草原として保存の価値がある」として特定植物群落に選定されています。妙岐ノ鼻では、４月下旬から１０月にかけてオオヨシキリ、セッカ、コジュリンが繁殖のため営巣や餌場として利用しています。また、１０月から翌年３月下旬にかけては、チュウヒが塒（ねぐら）として利用しています。
このような豊かな自然にふれあえる妙岐ノ鼻は、環境学習の場としても利用されるなど人と自然との関わりの深い場所となっています。

妙岐ノ鼻で見られる鳥類

妙岐ノ鼻では、時期によって異なりますが、20～40種類ほどの鳥類が観察できます。

オオヨシキリ（ヨシキリ科）

種の保存法　指定なし
環境省RDB　指定なし
茨城県RDB　指定なし

オオヨシキリは、全国各地の水辺のヨシ原、水辺の低湿地に、夏鳥として飛来し繁殖します。
妙岐ノ鼻では、草地環境全体（カサスゲーヨシ群落、カモノハシーヨシ群落など）を営巣場所として利用しています。

セッカ（セッカ科）

種の保存法　指定なし
環境省RDB　指定なし
茨城県RDB　指定なし

セッカは、沖縄県から秋田県にかけての草原や水田に夏鳥として飛来し、チガヤなどのやや丈が低いイネ科が茂るやや湿った草原を好み繁殖します。
妙岐ノ鼻では、草地環境全体（カサスゲーヨシ群落、カモノハシーヨシ群落など）を営巣場所として利用しています。

コジュリン（ホオジロ科）

種の保存法　指定なし
環境省RDB　絶滅危惧Ⅱ
茨城県RDB　絶滅危惧Ⅱ

コジュリンは、本州と九州のごく限られた地域のカモノハシなどが茂る草原、干拓地の湿った草原、休耕地として放置された水田などで繁殖します。冬は、関東南部以南ですごし、特に東海地方、近畿地方、中国地方の沿岸地帯で多く見られます。
妙岐ノ鼻では、草地環境の中でも、カモノハシーヨシ群落を好んで営巣場所として利用しています。

チュウヒ（タカ科）

種の保存法　国内希少野生動植物種
環境省RDB　絶滅危惧ⅠB類
茨城県RDB　絶滅危惧ⅠB類

チュウヒは、冬鳥として北海道、本州や九州の湿地や干拓地、湖沼岸、河川の岸辺などの広いヨシ原に飛来します。
妙岐ノ鼻は、国内有数の越冬地であり、多い年では50個体以上を確認しています。

※QRコードから鳴き声を聞くことができます。

妙岐ノ鼻で見られる植物

妙岐ノ鼻で行った植物調査では、約１００種の植物が確認されています。

ヨシ（イネ科）

ヨシは、霞ヶ浦全域で見られる高さ2～3mの抽水植物で、茎を密生して大群落をつくります。

カモノハシ（イネ科）

カモノハシは、高さ約0.6mの多年草で、夏から秋にかけてつける2本の赤紫の花穂がカモのくちばしに似ていることからこの名が付きました。

カサスゲ（カヤツリグサ科）

カサスゲは、高さ約1mの湿生植物で、群落を作り、花を咲かせます。
昔は乾燥させた葉を蓑笠(みのかさ)に用いました。

カドハリイ（カヤツリグサ科）

カドハリイは、湿地に生える多年草で、霞ヶ浦以外では確認されていない貴重な植物です。

妙岐ノ鼻のヨシ利用とヨシ焼き

ヨシ（葦）は茅葺き屋根や葦簀（よしず）の原料として利用されており、妙岐ノ鼻で生育するヨシは品質が良いことで有名です。
1955年（昭和30年）頃、ヨシの需要は多く、妙岐ノ鼻のほぼ全域がヨシ利用のための刈り取りの対象でしたが、住宅の屋根が茅葺きからトタンや瓦に移り変わったことにともなって、ヨシの需要が減少していきました。
このため、刈り取られなくなり立ち枯れするようになったヨシを焼くことにより、新たなヨシの芽生えを促したり、病害虫を駆除するためヨシ焼き(地元では「ヤーラモシ」と呼ばれています)が行われています。

〔ヨシ焼きの様子〕
2019年(平成31年)3月3日撮影

〔水戸 偕楽園 好文亭〕
2021 年(令和3年)6 月8 日撮影

妙岐ノ鼻で刈り取られた茅（かや）は、カモノハシを主体としたもので品質が良く、「しまがや」と呼ばれ高く評価されています。
また、水戸・偕楽園の好文亭をはじめ、多くの文化財の屋根の葺き替えや修繕に利用されるなど、伝統文化財保全の観点からも重要です。